

〈特集〉

序説： 多言語コミュニケーション空間  
「マルク」における言語習得と言語使用

サウクエン・ファン

Introduction: Language Acquisition and  
Language Use in the MULC as a  
Multilingual Communication Setting

Sau Kuen FAN

The aim of this special issue is twofold. Firstly, to commemorate the 10<sup>th</sup> anniversary of the Multilingual Communication Center (MULC) at Kanda University of International Studies (KUIS) founded in 2008, this special issue is dedicated to serve as an academic platform to discuss some major pedagogical attempts and achievements of foreign language teaching and learning through reviews of activities which have taken place in various language areas within the MULC. Through such discussions, this issue also aims to shed light on the significance of language acquisition and language use in a uniquely designed and laid out open space for autonomous learning of 7 different languages (i.e. Chinese, Korean, Indonesian, Vietnamese, Thai, Spanish, Brazilian Portuguese)<sup>1)</sup>, and for the promotion of initiative communication through one's target language and across the boundary of languages.

There are six papers in this special issue. In the first paper, Fujita, the first director of MULC, gives an overview of the curricular and administrative background for the development of MULC as a multilingual communication center. Imasato & Yoshino, Aono, Pornsri and Suyoto deal with issues related to the teaching of Brazilian Portuguese, Chinese, Thai and Indonesian as a foreign language respectively. The authors in these four papers discuss how to reinforce foreign language teaching and learning through concepts such as plurilingualism, motivation, community of practice, and interactive-contextual mechanism. In the last paper, Aoto draws our attention to

multilingual and multicultural issues in the real world through an analysis of Paraguay's linguistic rights and bilingual education under the current language policy.

**キーワード:** 多言語コミュニケーションセンター、「MULC」、「マルク」、  
外国語教育、多言語談話空間、複言語主義、言語政策

2008年秋神田外語大学の7号館が落成し、その2階に当時類のない外国語自律学習施設「多言語コミュニケーションセンター」(Multilingual Communication Center、略:「MULC」、愛称:「マルク」)が開設されました。「多言語」とは本学で専攻できる中国語、韓国語、インドネシア語、ベトナム語、タイ語、スペイン語とブラジル・ポルトガル語の7言語を指し、センターの中にそれぞれの言語エリア、さらにインターナショナル・エリアを設けてあります。もともと「疑似留学空間」としてデザインした本センターは、各言語エリアの物理的な環境が徹底されただけでなく、ネイティブ教員と留学生が配置されており、企画通りに各言語の自律学習活動がスタートしました。ところが、まったく異なる7言語のエリアが日々同じフロアを共有することによって、特にイベント活動の相乗効果が高まり、他学科他専攻の学生同士の交流も促進されたようです。そういう意味で、MULCは名実ともに多言語コミュニケーションの空間へ発展してきたのです。

本特集では、MULC開館10周年にあたって、現場の担当者が今まで行われてきた試みと成果を振り返ります。そのような振り返りを通して、MULCのようなユニークな学習環境における言語習得と言語使用の意義をさらに考えることとしたいと思います。

本特集は以下の6本の論文から構成されています。

**藤田論文:** 著者はMULCの初代所長として長年務めた経験から、MULCの立ち上げから軌道に乗せるまでの試行錯誤を振り返りながら、先行して行なわれていた「選択外国語科目」(すなわち、専攻語ではなく、自由選択科目として開講される外国語科目)の教育改革が、MULCの誕生を後押ししたことを論じる。

**今里・吉野論文：**MULCのブラジル・ポルトガル語エリアでは、「疑似留学空間」として積極的にさまざまな文化イベントが開催され、ポルトガル語によるコミュニケーション活動が行われてきた。本論文では、そのような活動の内容を報告すると同時に、利用者に対して実施したアンケート結果に基づき、ブラジル・ポルトガル語エリアでどのような多言語・多文化コミュニケーションが行われたかを考察し、「疑似留学空間」としてMULCが持つ教育効果について考察する。

**青野論文：**MULC中国語エリアの専任教員である著者は日々学生との関わりから、まず中国語エリアのハード面とソフト面を紹介する。続いて、それらのリソースを活用することによって、当エリアは中国語専攻学生の自立学習を支援することに留まらず、彼らの中国文化や中国人の考え方の理解を促進する得難い空間になってきたことを分析する。著者は今後も引き続き学生にとって中国語に取り組む意欲向上の場として発展させていくのに工夫を重ねる必要があると指摘する。

**ポーンシー論文：**著者はMULCのタイ語エリアに建てられたサーラー(Sala、古来より伝わるタイの休憩所)は、大学の外国語学習への取り組みを象徴するだけでなく、タイ語を学ぶ学生の実践の場(Community of Practice, CoP, Wenger, 2009)の形成と維持においても重要な役割を果たしていることを報告する。学生たちはCoPへの参加を通じて、タイ語を学ぶ動機を生み出し、維持できることが多く見られる。本論文では、彼らが行っている活動をCoPの概念に基づいて分析し、さらにCoPの概念を掘り下げるために外国語学習の動機に関する最近の理論との関連性について考える。

**スヨト論文：**外国語学習者のためのインドネシア語(*Bahasa Indonesia bagi Penutur Asing*、略称BIPA)を教えるさまざまなモデルがあるが、本論文では、教授者と学習者の間で形成される教授—学習プロセスに注目し、その中で見られる練習、実践および参加を促す「対話型・文脈メカニズム」(interactive-contextual mechanism)の重要性を指摘し、学習者が現実世界でも適切な言語使用ができるように、言語活動を実施する際に必要とされる手順やテクニックを検討する。

**青砥論文:** パラグアイは、スペイン語、ゲアラニー語、少数先住民諸語、ポルトガル語、日本語、コリア語、ドイツ語などの言語が話されており、多文化、多言語の国である。本論文は、パラグアイの言語法に着目し、1990年代以降政治体制の変動によって新たに制定された公用語や、バイリンガル教育計画や、言語法に伴う言語政策の歴史を概観すると同時に、言語法と関連データの解釈を通じて、言語権とバイリンガル教育について考察を行う。

本特集を企画しはじめたのは2016年の春でした。企画中に、イギリスの欧州連合 (EU) からの離脱表明や、アメリカのトランプ政権の誕生などのビッグニュースが次々と耳に入りました。日本においても今年の4月から入国管理法の改正が行われることとなります。人の移動によってもたらされたとされるグローバリゼーションはこれからどの方向に向かって進行していくのでしょうか。本特集を通して、更なる議論が促進していくことを願ってやみません。

#### 注

- 1) <https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/main/campuslife/facilities/mulc/>